

# 福島区歴史研究会 会報

## 第六号

2016.2

### 福澤諭吉記念室 誕生秘話

福島区歴史研究会会長 太田 勝義

## 目 次

福澤諭吉記念室 誕生秘話	1
戦争の証―町会に残っていた	
「大日本婦人会」関係資料―	4
荻田善彦	
発掘で見つかった「堂島窯」	10
岡倉光男	
街区「ほたるまち」愛称名雑感	13
岡倉光男	
終戦七〇年記念講演を聴いて	17
田野 登	
戦国時代 野田福島の合戦―平成二十七年度	
第二回福島区歴史研究会セミナー報告―鳥山忠昭	19
二〇一五年の活動報告	21
末廣 訂	
下半期の事業	24
下半期の活動記録	24



昭和五九年（一九八四）十一月一日に一万円札の肖像が聖徳太子から福澤諭吉先生（以下敬称略）に変わる事が、日本銀行から発表された。

聖徳太子は一〇〇円、一〇〇〇円、五〇〇〇円、一万円札と  
いつ、いかなる時も日本の最高紙幣の肖像であったが、それが  
今回は採用されず、福澤諭吉になるのだから、それは一大事（？）  
でもあった。

大分県中津市では早速、市長、商工会議所  
会頭ら幹部一七人が来阪し、各地で福澤諭吉  
は中津市が本家であると名刺を作ってPRに  
努めている事を新聞で知った私は、大阪市の  
動きの悪さに何とか手を打たないと遅れを取  
ると焦った。中津市は福澤旧宅が昭和四六年  
に文化財に指定されたのに続いて、回りの五  
二〇〇坪を福澤公園とし、銅像を建立し、記  
念館を建てている。「福澤といえは中津市」  
と言われる位。

一方、大阪市は生地であり、緒方洪庵の適  
塾で学んだ土地でありながら、何の顕彰もさ



中津の  
福沢銀行券

れていない。あるのは昭和二九年に慶応義塾の大阪OB有志の方々による「福澤諭吉誕生地」という、一・七mの碑が生地大阪大学医学部附属病院の前にポツンと寂しく建っているだけで、余りにも見すばらしい限りである。この際、大阪市はもつと顕彰し、せめて胸像を誕生地に建てたらどうかと、大阪市会の委員会で質問した。発行の二年前の昭和五七年一月一〇日であった。

答弁に立った道広みちひろ大阪市助役は「先生が大阪で生まれ勉強したというゆかりも大事だが、それ以上に大阪の風土の中で育まれた合理主義が先生の思想の中で脈打って新しい日本の先駆者としての行動につながっていったという事で意味がある。胸像を造る事も含め、早速検討する。史跡としても、観光面でも宣伝したい」と堂々と語り、最高のお墨付けをされた。当時の新聞に大きく取り上げられた。

これ程までに断言をしておきながら、その後の大阪市の動きは鈍く、業を煮やした私は、一年後の一二月に再度、退官された道広助役に代わった田井まゐ大阪市助役に質問した。助役は「日本の顔として、国際的にもより一層知られて行く。実行に移すべく努力してまいります」と。

続いて教育、文化面から、近藤教育長に「この辺りは中之島の文化ゾーンに位置するので施設とか公園にネーミングを冠す

ると共に、小中学生に平等の精神を顕彰出来ないか」と質すと、教育長は「福澤先生の人となりや、業績を学ぶ事によって大阪の文化と伝統を尊重しようとする気持ちが生まれると考えます。」と答弁。

結局、大阪市は次年度の予算に五〇〇万円を計上し、「学問のすすめ」の中の「天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず」の名言を碑とし、生誕碑の回りを学生達が囲むような形の大きな玉垣を配し、落成式には石川慶応義塾大学塾長と大島大阪市長、福澤諭吉のお孫さんの米山春子さんが参加され、昭和六〇年一月一三日、除幕式が行われ、我々歴史研究会のメンバーも数名参加した。生誕地としての大阪市の顕彰はこれで一応一幕を終える事となる。

ここからが記念室としての第二幕。私は中津市の記念館に及ばなくとも、小さくていいから記念館を作り、教育面での啓発を願うべく、教育委員会に直談判した。

大阪市は予算、場所を含め、具体的な話には乗ってこないのので、私は一計を案じ、昭和六〇年に福島区民センターの建設にとりかかる事になっていたのを幸いに、同センターの三階の会議室の一室か図書館の一角を福澤諭吉記念室に充てて欲しいと頼んだ。

当局は会議室は市民局のスペースだから無理だと。ならば図

書館の一角でどうかという事になったのだが条件がついた。

大阪市には各区に多くの著名人の生誕地がある。他区に波及しない為、福澤諭吉の固有名詞でなく、「郷土資料展示室」とし、右側に「福澤諭吉記念室」の名札を挙げる事としたい。又、前例が無いので管理、運営に大阪市の職員を専任で充てる事が出来ないから、歴史研究会がその責任の一翼を担って欲しいというものであった。以来、今日まで、福島図書館と研究会の協力関係が続き、今日に至っている。

そして昭和六二年四月、五年の歳月を要し、福島図書館内に郷土資料室と福澤諭吉記念室は完成した。

郷土資料展示室は地元ゆかりのある方々や資料、物品の展示にも好都合で、これまで松下幸之助、田辺聖子や野田藤などの展示をし、他区から見れば何とも羨ましい施設となった。福島区の歴代の図書館長がよく協力してくれ、展示、資料収集に奔走され、時には研究会と共催で催物を行って来たユニークな、貴重なお部屋である。

平成一六年一月一五日、二〇年振りに福澤新一万円札発行。当会のこれまでの努力と実績と「福澤諭吉記念室」という存在が、絶対唯一の証拠となつて、日本銀行の認める拠となり、当会に「A〇〇〇〇〇7A」「06A」券は大阪市内」という素晴らしい新札を頂いたのである。交付式はここ、記念室で執り

行われた。この新札はテレビ「なんでも鑑定団」にも出場し、大変高い評価を得た。当会発行の三十周年記念誌、『なにわ福島ものがたり』の一三〇頁を参照されたい。

雑誌『大阪人』平成三二年一月号に「知る喜びを生きる力に」と題し、福島図書館が紹介され、明治維新の志士と経営の神様の二人の偉人が架空対談したら：とし、想像力たくましく、諭吉翁と幸之助翁に会いに図書館を訪ねてみよう」と記している。続いて、出版物以外の常設展示は図書館では珍しい。福島図書館の郷土資料展示は市内の地域図書館で最も充実している。福島の歴史発掘に取り組む市民グループ「福島区歴史研究会」の熱意が実を結んだ。福島ゆかりの偉人達の生き方を学べる文献資料が目白押しだ。同歴史研究会のメンバーが地道な調査で発見した貴重な資料が少なくない。歴史に関心があれば、一度立ち寄ってみたい。と最大級の評価をしてきているのが嬉しい。

福澤記念室と郷土資料展示室とは、仲の良い夫婦の如く、お互い扶<sup>たす</sup>け合っている関係といえようか。

因みに、郷土資料展示室には、『福澤諭吉全集』全二一巻、『西洋事情』『学問のすすめ』ほか、『松下幸之助発言集』全四五巻、大阪各地の郷土誌、区史、地図、『大阪市史』、『大阪府史』、『大阪府誌』、『上方』、『上方芸能』、『大阪春秋』、大阪府・市統計書。各区広報誌など、正に郷土資料の宝庫と言

えようか。我々の誇りである。



## 戦争の証<sup>あかし</sup>

―町会に残っていた「大日本婦人会」関係資料―

萩田 善彦

突然のことで驚いた、平成二十六年一月のある日、福島五丁目西町会長・黒田修氏が拙宅へ古びたトランクを持ち込まれました。

これは代々町会にお住まいの方が先の大戦時に婦人会が苦勞して戦費供出した捨てがたい資料で、一度はご覧いただけたらと預かったものであるとのこと。

かねてよりみなさんに歴史研究会の資料として古い町並みの写真があればとお願いしていたところであり、写真ではないが貴重な資料として一旦お受けしました。

開けてみると紙片が隙間なく入っている、変色し傷んでいる

## 参考

『毎日新聞』一九八二年二月一日「知ってましたか？福沢諭吉は大阪生まれ ゆかりの地に胸像を」

『大阪新聞』一九八三年一月一日「激烈！大阪VS大分 新1万円札の肖像戦争 福沢諭吉めぐりホットな“本家盗り” 生地はこちら 大阪 史跡「旧居」や遺品も 大分」

も、台帳・通帳類は今もすっかりして、文字も十分読むことが可能である。

長年眠っていた資料を前に、戦後生まれの私、知識もなく少々困惑するも来年、平成二十七年は戦後七十年、歴史研究会で関連展示の企画があり、今回展示品としていただいた。

福島図書館郷土資料展示室での展示は終了したが（二十八年四月から区役所で展示予定）、今回記録として、又ショーケースの中では手に取って見られないこともあり、今回資料を区分別に紹介する。旧字は原則として常用漢字にしている。

とは言えまだまだ理解不足間違いもある事と思うのでご容赦下さい。

資料は大きく分けて六種類とした。

その一（会員名簿台帳一冊）写真A

大日本婦人会 会員名

昭和拾七年五月十四日 摂取院ニテ初会

入会申込人員 二百三十九名（二名加計二四二）

入会 会費 一人 六十銭（但一年分）

大阪市此花区上福島中二丁目

大日本婦人会

※内表紙を転記

続き役員欄あり

顧問 四名 理事・参与・審議員 各一名 氏名記載

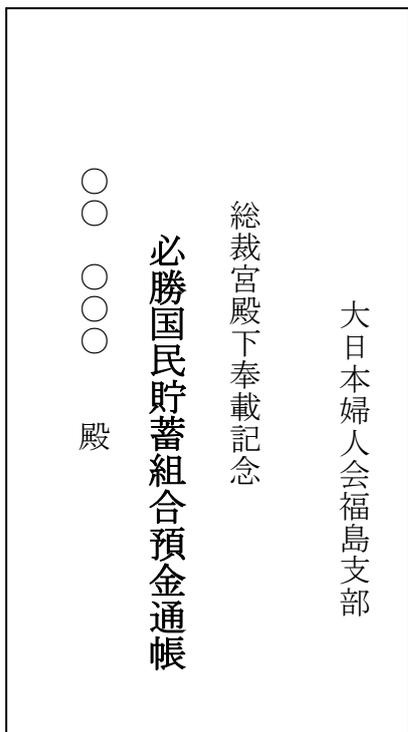
各組に左記二十四名とあり一組々二十四組の氏名が記載されている。

※会長名が無いのは、中二丁目町会は末端組織であり福島支部の第九班であったからか、或いはトランクに記載の町会内部主婦会の立場か不明。又現在の町

会内班組織は「組」いわゆる隣組、今も使われる言葉通り。

続いて組別に 番地・世帯主名・会員名が全員分記載第二十  
四組の次頁に昭和十八年四月役員改選として部長・副部长・補  
佐二名会計と第一〜第二十四組長名があり又末尾には、傷痍軍  
人名等も記載されている―以後未調査

その二 (預金通帳) 写真B



表紙

全百二十七冊あり、内部は一頁四月〜翌三月迄の押印欄が三  
頁で三十六ヶ月ありその内一冊を紹介すると、昭和拾七年八月  
二十日発行、八月より三十二ヶ月昭和二十年三月までの納付印

がある。(注 昭和二十年三月十三日 第一次大阪大空襲)  
一ヶ月の預金額は二〜五円である。

何故大量の個人通帳がここにあるのか不明である。  
取扱は裏表紙に「御預金は ◆ 住友銀行へ」と記載されて  
いることから同行であろう。

その三 (貯蓄台帳) 写真C

組合貯蓄台帳(一人別) 甲及び乙

こより綴じ	一冊
紐綴じ	一冊
台紙のみ	一冊

通帳の台帳と思われるが用紙に甲・乙あり、甲は偶数月、乙  
は奇数月、甲・乙合算が各組合員の現在高と備考欄にあるが甲  
に奇数の五月分欄のあるものもあり詳細不明。

その四 (航空戦必勝貯蓄) 写真D

航空戦必勝貯蓄実行報告書

第〇隣組長 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 印

町会長 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 殿

標記貯蓄左記ノ通実行致候ニ付報告候也

記

記入欄に氏名・貯蓄実行額・備考欄あり組員名列記されている。  
貯蓄額は三〜六円であるが備考欄に組合預金と弾丸切手何枚の記載がある。

その五

(軍用機献納関係) 写真E

ゼムピン留一冊

受領書

一金 壹百貳拾四円也

但シ軍用機「日婦大阪市支部号」献納資金

右正ニ受領候也

八月貳九日

大日本婦人会福島支部 印

〇 〇 殿

右記受領書は印刷された用紙ではなく全て手書きであり、隣組別明細も便箋及び白紙に手書きであるものの、明瞭に丁寧に記載されている。

戦況も押し迫った頃と思うが年度の記載はない。

献納額は一人五十銭〜一円である。

又、この献納に関して「日婦大阪号」の感謝状もあったが今手元がない。

その六

(回覧・領収書・メモ類・トランク) 写真F

五種類に区分出来ないメモが多く含まれている。

その一枚―「ギルバート島貯七六六円」や解約者氏名・金額・

利子の月別明細・新入者名・月掛預金計・弾丸切手計

と限なく記載されている。

解約もあることから民主的に運営されていた一面もみられる。

その一枚―昭和十九年四月現在 会員数 一三三名 会費

百参拾参円貳十銭 のメモ、名簿の続きと思われる。

トランクは紙製であり黒色の塗料が施され金具は金属製なかなかしつかりしている、側面に大きく白色で「上福島中二町会主婦会」と書かれている。

## まとめ

昭和十七年（一九四二）五月十四日 大阪市此花区上福島中二丁目町会（現福島五丁目西町会）にて末端組織の「大日本婦人会」が設立され、終戦まで会員が戦費供出のため納めた関係資料一式であった。

テレビドラマ或は映画で女性達が空襲に備えた訓練をする場面をよく見るが、一方で極めて過大と思われる金銭的負担を各種課したかと呆れるばかりである。

しかしその資料書類の記載欄は全て懇切丁寧にペンで書かれ、設立名簿から詳細に始まり金銭の収受も明確に、整理もなされている事に感嘆する。

終戦と同時に全てが無効、

無駄となってしまうトランクが七十年に亘り保管されていたのは、周辺地区が空襲で焼失するも難を逃れた地区であったことと、女性たちの無念の想いが引き継がれたのではと感じる。

## 印象に残る標語

### 一 預金通帳裏面

銃後を守る日本婦人  
重い務も笑顔でになふ

### 二 回覧用箋

すべてを戦争へ

（大きく横書）

図書館展示風景



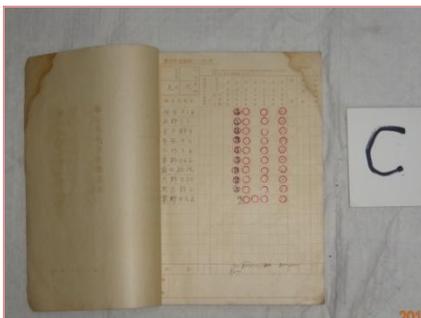
A 会員名簿台帳



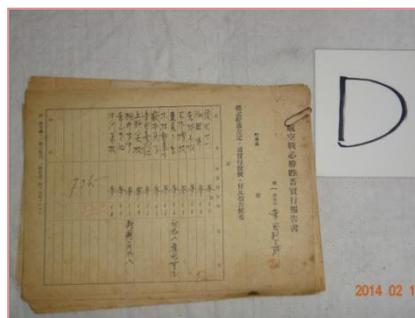
B 預金通帳



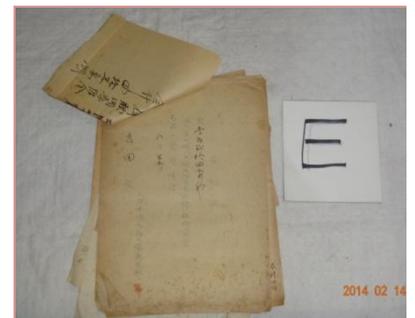
C 貯蓄台帳



D 航空戦必勝貯蓄



E 軍用機献納関係



F 回覧・領収書・メモ類・トランク



## 参 考

### ●大日本婦人会とは

昭和十七年（一九四二）、愛国婦人会・大日本国防婦人会・

大日本連合婦人会を統合して政府によって組織された。

二十歳以上の婦人は強制加入とされ、貯蓄増強・廃品回

収・国防訓練など、国家奉仕に動員された。

昭和二十年国民義勇隊に改編。

### ●物価比較

（週刊朝日編『値段の明治・大正・昭和風俗史』より）

駅 弁 上	昭和十八年	四十銭
牛肉百グラム	昭和十九年	四十六銭
大工手間賃一日	昭和十八年	三円九十銭
巡査初任給 基本月額	昭和十九年	四十五円
私立大学年間授業料	昭和十八年	二百円

## 発掘で見つかった「堂島窯」

岡倉 光男

堂島川に架かる田蓑橋と玉江橋間の北（右）岸沿いにあった、かつての大阪大学医学部附属病院跡地、福島一丁目一は、二〇〇八年より、「ほたるまち」と愛称名が付けられている。街区内の東寄り側に、検察庁他が入っている二四階層の「大阪中之島合同庁舎」が建っているが、ビル建設に先立って周辺土地の発掘調査が行われた。その際、調査の最終段階、一九九八年夏、北側の道路寄りの地点から、蔵屋敷の跡と、さらにその下から焼物を焼いた窯跡Ⅱやきもの工房跡が見つかった。

窯の存在期間は、盛り土の表層状態から、河村瑞賢が堂島川と曾根崎川（蜷川・梅田川〈上流〉・福島川〈下流〉）を改修、造成し終わった貞享四年（一六八七）の十七世紀末から十八世紀初頭のごく短い期間であったと考えられる。窯が廃止されたその上層に蔵屋敷が建てられた。宝永四年（一七〇七）の古地図「撰州大坂図鑑綱目」によれば、該当地に大村因幡守（純長）の名があり、肥前（長崎県）大村藩の記載がある。

享保元年（一七一六）七月四日夜、曾根崎村より出火、堂島全部を焼き尽くし、蔵屋敷一三カ所も焼失した。当時の焼けた土層の下部より窯そのもの跡が見つかった。これは大阪市では初めてで、唯一の発見である。

窯跡は三つあり、整理記録上名付けられた一号窯は、製品を焼くための小さな焼成室が階段状に連なる「連房式登り窯」と呼ばれる細長い窯で、この窯では釉薬を掛けて高温で京焼に似た硬質の陶器を焼いた。二・三号窯は平面鍵穴形をした「桶窯」と呼ばれる小規模の窯で、釉薬を掛ける前の素焼きを行う場合と、低温で焼かれた軟質陶器をつくる場合の二つの用途がある。一号窯では使用された、匣鉢・匣鉢蓋・トチン類・焼台など。焼かれた製品の中では、碗・向付・香炉・鉢・爛鍋・土瓶・鍋・土人形などがあり、いったん素焼きされたものを、絵付け、施釉して登り窯で本焼きしたものである。火災の熱を受けて釉が、白く変色してしまつたものが大半だが、もともとの釉の色が残っているものは、黄白色・黄灰色・灰褐色などがある。これらの陶器は、とても薄くつくられており、製作技術が高かつたこと分かる。形のバラエティも富んでいて、草花・茶筌・水鳥な

どを描いた文様は、あくまで繊細で優美な絵柄が特徴で、当時、まだ一般には普及していなかつた土瓶や鍋なども見られ、高級な製品が焼かれていたようだ。

最近の研究では、これらの陶器をつくる技術は、一七世紀の段階で、すでに京都から大坂に伝わっていたことが明らかになっている。

『撰陽群談』全十七巻・岡田篁志著・元禄十四年（一七〇一）刊行、序文に元禄十一年（一六九八）とある当時の代表的な地誌の巻十六に、市内窯焼き土器として、西高津と南瓦町の間にある高津焼。天満天神社近くの菅原焼。天王寺区小橋の高原焼。道頓堀の川上にある難波焼。等が紹介されているが堂島焼の記載はなく、窯の存在が、知られていなかったか、竣工が出版後であったのかは分らない。

大阪における連房式登り窯による焼き物づくりは、その後、十三から明治期に高津に移った吉向焼があつたが、その後途絶えてしまが残っていない。現在、焼物窯としては平成六年、此花区の舞洲陶芸館内に、大阪市内で唯一の本格的な登り窯と穴窯ほかが出来、「難波津焼」とよばれる大阪湾海底の陶土を利用



2008年 福島区役所1階ロビーでの展示

した、特徴ある製品の工房がある。

堂島窯出土の品は、平成一八年一二月九日より三カ月間、福島区内での文化財ということで、福島図書館郷土資料展示室にて、窯の原寸大の写真と実物の窯道具、それに多数の焼物製品に解説を添えての展示があり、その後、平成二〇年一〇月には、新築したばかりの福島区役所一階ロビーで、掘り剥がし出された一号窯の、保存処理された実物の展示がなされた。

#### 参考資料

大阪市文化財協会「堂島焼と蔵屋敷」展示体験用、講座資料。

二〇〇六年

佐藤隆「堂島蔵屋敷の下層で見つかったやきもの工房」

(大阪市文化財協会編『大阪遺跡』創元社 二〇〇八年 所収)

『葦火』第七七号 大阪市文化財協会編集・発行

一九九八年一二月



## 街区「ほたるまち」愛称名雑感

岡倉 光男

福島区福島一丁目一の街区は、二〇〇八年より、愛称「ほたるまち」と命名された。その謂れについては、江戸中期の俳人・画家でもある、与謝蕪村の俳句「淀舟の 棹の雫も ほたるかな」に因んで付けられたとされている。

この命名について、田野登さん（大阪民俗学研究会代表・文学博士・本会会員）は、人形浄瑠璃『曾根崎心中』（注1）近松門左衛門Ⅱ作の床本（台本・脚本）。天満屋（注2）の段、

「恋風の・身にしじみ川（注3）流れては、そのうつせ（注4）貝・現なき・色の闇路（注5）を照らせとて、夜毎にともす灯火は、四季の螢よ、雨夜の星か、夏（注6）も花（注7）見る梅田橋……」の文中にある「螢」に全く触れていないことを指摘されている。蕪村と同様、どちらも、螢そのものではなく事象の例えで、尤もなことだと思う。

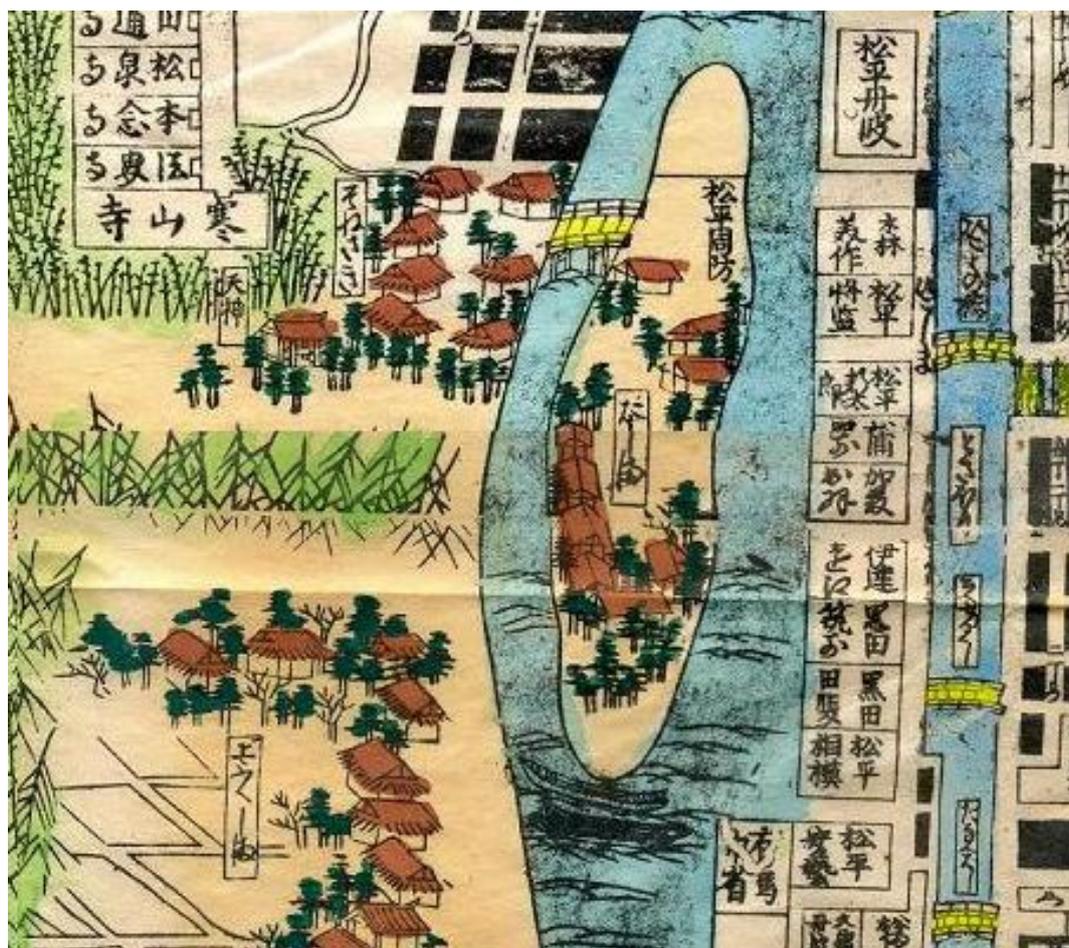
元禄頃の風俗を描いた「浪花曾根崎図屏風」（大阪歴史博物館蔵）の六曲一双の納涼舟遊図では、隻の左端に曾根崎川に架かる梅田橋があり、橋下の舟以外、三艘の舟遊び中の対岸に、お茶屋の屋号を入れた掛け行灯と襖・障子・屏風が見え、普段は

奥座敷になる納涼川床が三部屋描かれている。南（左）岸が堂島新地（注8）なので、六曲屏風画の右側は下流になり、新地の中心部として描かれ、古地図（注9）にも記載のある「ちや屋丁」は「ほたるまち」側である。

蕪村の経歴から、発句の心象風景場所は、もっと上流で、近松の書いた例えの意「水面に映える小さな複数の優しいひかり」が、土地の関連や比定から言えば、当該地境界の場所・情景とも合致する。

「ほたるまち」という印象的なネーミングは、コピーライターの道面宣久氏が発案された。経緯は多分、市からの依頼があつて、応えられ採用されたと思われる。

『日本大歳時記』（講談社）に採択されている叙景歌と、著名ではあるが文節の一部との違いはあるものの、田野さんご指摘の文楽の大夫の語り（最近では、舞台上部に横書きで字幕が映される）と歌舞伎の演目にもある近松作品からの参酌・引き合いを、「ほたるまち」命名根拠のもう一つとして紹介し、複合施設の愛称名が、より親しまれ好感度で気軽に使用・汎用され、もっと普及さればと願っている。



江戸初期のほたるまち周辺  
『新板大坂之図』 明暦三(一六五七)より

現在、国道一・二号線の市内中心部、東は東野田交差点より西は野田阪神駅前交差点まで「曽根崎通」の名称が標示されている。同じような愛称名ケースの提案だが、街区「ほたるまち」は、近代大阪の黎明期に、国鉄大阪駅設置の候補地にもなり、以後、堂島川右岸水辺の通りに面して、官公庁・大会社・学校・諸施設などが出来て大阪市発展の中核となった。その堂島浜通りを含む、天満橋北詰～堂島大橋北詰間の道路は、中心部が「ほたるまち」沿いなので、愛称名「ほたる(浜)通り」が良いかとも考えられるが、それよりも、玉江橋北詰東の、もと豊前中津藩蔵屋敷地内に、福沢諭吉の生誕地碑が建てられている。前の道路は、彼の幼時又は青年時の居住地沿いになるので「諭吉通り」か「福沢通り」名が相応しいのではないか。姓か名か姓名か、普通に推量すれば「福沢通り」だが、名を採用した道頓堀や宗右衛門町他のように、広く馴染まれば「諭吉通り」も捨てがたい。この件(注10)は、特に沿道の人達の賛同が大切だが、如何であろうか。

因みに中津藩国許の現、大分県中津市では「福沢通り」や「福沢公園」が早くからあり、通り名を冠にした郵便局や福沢関連の商品が多数あって、その顕彰と親しみが、市民に定着してい

る。

認知度抜群の愛称道路名が、大阪でも使われ普及すれば、今更ではあるが福沢諭吉の顕彰にもなり、いにしえを偲ぶだけでなく「えん」を大切に、身近にしたい人達の来訪が、今より多くなり「ほたるまち」の発展や「ほたる港」の利用に寄与することは間違いない。

以前、堂島川に「蛍」が、飛んでいたかという話になったとき、宗呂卓一さん（本会元会員・元毎日新聞社写真部員）は、戦後すぐ、実際に蛍が飛んでいるのを見たことがあると言われていた。私も昭和二十一・二年夏に、満潮時には汐の香りがある、上船津橋の欄干から飛び込んで、泳いだことが何遍もあるが、何時も川底が見えていた。川岸の茂みに蛍が棲息しているも、さもありませんと思える程、水が澄んでいたが、その後、<sup>すず</sup>煤交じりの汚れた川になるのも、右岸の岸辺に屋舎の建つのも早かった。

近年、川の水質は、少し下流域が舞台の物語である昭和三一年頃が時代背景の、『泥の河』（宮本輝著）が映画化もされ話題になったが、その三・四年前から昭和三〇年代が汚染のピークで、当時川底にはヘドロが堆積して、メタンガス発生の原因と

なっていた。その後、多くの関係者の尽力もあって、徐々に浄化が進み水質は随分と奇麗になり、透明度は年々増してきつつある。岸辺の茂みも少なくなったが、何時の日か、放して飛ばすのではなく、中之島公園辺りにでも、天然の蛍が回帰して、その乱舞が観られる日が、来るであろうことを期待している一人である。

宵闇に 鳴かぬ蛍が 身をこがす 〈注11〉



「曾根崎川跡」碑 （北区曾根崎新地1丁目）

〈注1〉初演、元禄一六年（一七〇三）五月七日、道頓堀・竹本座。

〈注2〉堂島新地中町筋にあった茶屋。南側（堂島川）より、浜中、北、裏の町筋があった。

〈注3〉「沁む」と「蜷川」をかける。

〈注4〉から（空）（虚）の貝。蜷と現にかかると。

〈注5〉色恋に迷った心の闇路。

〈注6〉心中事件が、陰暦夏四月七日に起こったことによる。

〈注7〉「花」と「梅」は縁語。

〈注8〉現在の北区・福島区にまたがる。堂島川北岸から蜷川南岸にわたる新地。町屋・蔵屋敷・遊里があり、遊里は、元禄元年（一六八八）に幕府より茶屋他が許可された。なお蜷川上流北岸の曾根崎新地は宝永五年（一七〇八）に遊里が開設された。

〈注9〉「撰州大坂図鑑綱目」宝永四年（一七〇七）・正徳三年（一七一三）板。

〈注10〉現在（三代目）の福沢諭吉生誕碑の除幕式当日（昭和六〇年一月一三日）私（岡倉）は、式典現場で当時の大島市長に直接「上申書」をお渡ししたが、なしの礫であった。

〈注11〉都都逸「恋に焦がれて鳴く蝉よりも鳴かぬ螢が・・・」より部分借用。

## 参考資料

『大阪の問題集 第一回』大阪検定公式出題・解説集

創元社編 二〇一〇年三月

『近松門左衛門集』日本の古典 56 森修・鳥越文蔵校注・訳

小学館 一九八四年二月

『文楽鑑賞教室 第一九回』国立文楽劇場編集 二〇〇二年六月

『曾根崎心中』上方文化講座 二〇〇八年八月 和泉書院

『なにわ大阪再発見』第七号 なにわ文化研究編

大阪21世紀協会文化部発行 二〇〇四年一月

『大阪府地名大辞典』角川書店 一九八三年一〇月

\* 堂島新地等に付いて、田野登さんに、ご教授頂いた。

記して感謝する。



## 終戦七〇年記念講演を聴いて

田野 登

八月は盆月であるが、戦争を省みる月でもある。今夏は、終戦七〇周年ということで、ことさら戦争にまつわる行事が各地で繰り広げられた。私たち福島区歴史研究会は、八月二三日、福島区民センターにて「終戦七〇周年記念講演」を開催した。以下、当日の模様を講演内容を中心に、私の感想を交えながら報告したい。

第一部は記録映画上映、第二部は関係者挨拶、玉音放送音声再生に引き続き、二人の講演があった。

記録映画は、一九九〇年大阪国際平和センター企画「大阪大空襲『焼きつくされた大阪の街』」だった。昭和六年九月の「満州」（中国東北部）における事件を発端に十五年戦争が始まった。やがて同一六年一二月に太平洋戦争に突入し、戦争へ戦争へと日本が進むさまが語られていた。圧巻は、二〇年三月五日深夜の無差別焼夷弾爆撃による「焼きつくされた大阪の街」の場面である。戦後の昭和二五年生まれの私には、その凄惨さに息を呑むシーンの連続である。参加者一同、終戦に至る一連の歴史の流れを共有できたと思う。

第二部は講演に先立ち、玉音放送の再生があった。私なんぞ「君が代」が流れると、目を瞑<sup>つむ</sup>ってはなるまいと思いつつ、胸

にジーンとくる。終戦の詔勅は口語訳付のプリントが配付されている。「天皇陛下のおことば」が「戦後」の基点であることは間違いない。

講演の一本目は、岡和雄氏（海老江在住）による「秘話・終戦の玉音盤にまつわる近衛兵の思い出」だった。岡氏は、大正一年、川上町（現在の吉野二丁目）に生まれ、海老江で育った。長じて近衛師団の一員として皇居で終戦を迎えたとのことである。八月一五日は朝三時まで、「宮城」において一〇時に部隊に集結、正午に全員集合して玉音放送を聴いた。兵隊である岡氏は、その時まで「終戦」は知らなかった。三月一〇日の東京空襲の被害はひどかったらしい。金庫以外、みな焼かれた。その日は陸軍記念日で、その日が狙われたともいう。その彼は、六月頃には、薄々、敗戦を感じていた。五月二四日の空襲があった、天皇陛下は御文庫に移られたとのこと。終戦前日の八月一日、中佐、少佐あたりから「国体」が維持できないならば、天皇陛下を擁して近衛兵を使って終戦の玉音盤を探せという動きがあったようだ。玉音テープを見つけていたならば戦争をまだやっていただろうと彼は話す。彼の話すことが、どこまでが実体験で、どこからが映画などの媒体による「物語」なのか、私には区別がつかない。その彼の語る「戦後」についても、当時の日本人に、共感されるところもあるが、ここには記さない。

九三歳を迎え、なおかくしゃくたる岡氏である。彼の話す「戦後」を聴いて、兵隊として他ならぬ皇居で「終戦」を迎えた人においては、七〇年の歳月を経た今日、なお更新されないままの「戦前」の歴史観が生き続けている不思議を私は感じた。

講演の二本目は、内藤眞治氏(鷺洲在住)による「中学生の時に終戦を迎えて」である。内藤氏は、昭和六年、鷺洲生まれである。当時の住所は「大阪市西淀川区浦江中一丁目一八番地」。終戦の時は学徒動員で工場で飛行機部品を造っていた。しかし、空襲警報が出たら帰らされ、学校のある淡路から十三まで線路伝いに歩き淀川の堤防に沿って帰った。帰り道で空襲に遭って、防空壕に逃げ込んだが、壕から出てみたら、外には壕に入れずに亡くなっている何人もの女性を見たこともある。妙壽寺北の国鉄ガードで空襲に遭った時は、ガードの上に列車が停まっているのを知って、初めて自分目がけてでなかったことに気づいた。聖天通りの近くでは、風呂屋の水をバケツリレーで延焼を食い止めた。類焼を防ぐためロープで引張って家を壊した(建物疎開)。それが戦後、鷺洲中公園になった。桜橋から梅田新道を歩いて行ったとき、軍隊が行進をしているのを見た。その時の恰好は木刀を肩に、腰には竹の筒だった。鉄砲も水筒も無いようではもう、ダメやなあと思った。野田阪神にあった高射砲陣地からは一回だけB 29を落とすとした。記念品にか、一斗樽の酒が置かれていた。

内藤氏が語られる空襲体験は、当時、大阪に住んでいた多くの人の体験と重なるもので、戦争体験のない私にも深い感銘を与えるものであった。

二人の講演の後、会場から挙手しての発言があった。戦争があった時代、生きていた人たちにとっては、思いの丈を話したかっただろうに。この催しだけでは、十分、語り尽くせるものではなかったように思う。

今回は、映画上映から始まり、玉音放送の再生、講演といった進行であった。その時代を生きた人の思いは、さまざまだろう。それでいて、生々しい体験を淡々と語られた話には、生活実感が感じられ、それに触発されてか、自らの空襲体験を語られる参加者が出たのだろう。この思いは大切にしなければならぬ。そう思う。戦後七〇年、体験の風化が危ぶまれて久しい。そういう風潮のもと、講演会が開催され、図らずも当時の惨状を喚起したのだろう。後世に、次世代に自らの体験を伝承してゆくことは、歴史研究会のつとめかと私は思う。



# 戦国時代 野田福島の合戦―平成二十七年年度

## 第二回福島区歴史研究会セミナー報告―

鳥山 忠昭

日時 九月十三日(日) 午後四時～五時半

会場 玉川コミュニティセンター二階ホール

講師 出水康生氏(三好長慶会代表)

テーマ 「戦国時代 野田福島の合戦」

三好一族と織田信長の攻防

参加者 八十四名

### 一 開催の経緯

一九九九年に徳島県で出水康生氏を代表に三好長慶会が結成されて、地道に郷土の歴史の再認識と宣伝活動をされてきた。二〇一四年から一五年にかけて全三回、近畿徳島県人会が大阪歴史博物館を会場に「近畿とくしま歴史講座」を開催した。この講座で出水氏は、三好長慶の国家観、人生観また歴史的評価などと三好一族の活躍を詳しく講演された。

福島区歴史研究会では前事務局長の井形正寿氏、岡倉現副会長が、野田界隈の町歩きを開催した時に、たまたま出水氏が友人と参加されていた。この時に野田藤の説明もあり、その中で三好一族の和歌が紹介され、出水氏は興味深く記憶の中に刻み

こまれた。その後会員の藤三郎氏が歴史研究会三十周年記念誌(二〇一二年)に「野田城と戦国三好一族」という論文を発表していた。この論文において天文十一年三好長慶が遊佐長教の援兵として野田城から出陣したこと、また、「椋橋城」攻略の為「野田城」から出陣したこと七・八万といわれる織田信長の大軍と一万二千の三好衆と雑賀衆三千人の間で鉄砲三千挺を撃ち合った大銃撃戦があった事などが書かれている。

そして、末尾の「謝辞」において今回講師をされた出水氏から参考文献を送っていただいたお礼をされていることから、藤三郎氏と出水氏も旧知の間柄であることが判明し今回の講師としてお招きすることになった。

### 二 講演内容

○織田信長が上洛する以前二十年間、山城・大和・丹後・丹波・播磨・摂津・河内・和泉・阿波・讃岐・伊予・淡路など畿内十一カ国にわたり三好政権は支配していた。

○「応仁の乱」の後足利義維・細川晴元・三好元長が「堺幕府」(一五二七～一五三二)を開いていた。三好長慶の父 元長がこの政権の実質的な立役者であった。

○その後の三好長慶時代の政権の概要。

◎経済力・材木の供給・阿波藍玉あいたまの供給、京都の座の規制

緩和、染色法の向上、木綿布の普及などで需要が増加した。南蛮貿易により諸物資の流入などで繁栄した。また、法華宗徒との連携による経済・流通体系を形成した。

◎軍事力・鉄砲の大量生産と火薬の輸入により戦闘力の増強。三好一族の瀬戸内海航路の制圧。阿波・讃岐・淡路トライアングルと環大阪湾政権（西宮・尼崎・堺・高槻・大東・四條畷）の確立。

○政治力・四人の兄弟、四人の姉妹の援護、即ち三好実休が阿波の芝生城・勝瑞城を本拠地とする、三好冬康は淡路水軍の炬口・由良を、三好一存は讃岐十河氏を継ぎ、三好冬長は淡路志知の野口氏を継いだ。四人の姉妹は有力国人である有持氏（上浦城）に、海部氏（海部城）に、一宮氏（一宮城）に、大西氏の（池田大西城）の正室として嫁した。さらに一人は千利休に嫁いだ。千利休と三好長慶は一五二二年の同年生まれで、「終の住処」を大徳寺聚光院、堺の南宗寺とする強い関係があった。

○政治理念・「理世安民」・「理」即ち覇道に対する王道（仁）による政道または道理）を根底に仁道により国を治め、民が平安に暮らせる国家を目指そうとするもの。

○文武両道・軍事力に優れていただけではなく三好長慶とその一族は和歌に堪能で「朝廷との良好な」関係を保つためにも連歌会などを催した。

「歌連歌ぬるきものぞと言う人の梓弓矢を採りたるも無し」

（長慶）

「ここもまた同じ心に春日さす光にもれぬ藤の神垣」（長逸）

「難波江の流れは音の聞こえて野田の松枝にかかる藤波」

（政康）

「春日野のゆかりの色の宮居ます若紫の野田の藤波」（友通）

○石山合戦（一五七〇～一五八〇）の火ぶたを切った野田・福島合戦（一五三〇）

天下統一を目前に信長が上洛し、対して三好長慶亡きあと政権を支えていた三好三人衆と本願寺十一世顕如などが信長と戦った。三好勢は雑賀の鉄砲隊三千を含めて布陣した。この戦いは多量の鉄砲を組織的に使用した日本最初の大銃撃戦であったがそれより五年後の「長篠合戦」が日本最初の大銃撃戦であるとされているのは残念である。しかしこの合戦は「石山合戦」開戦のきっかけになった歴史的に大きな意味のある出来事であった。

野田・福島勢は三好三人衆（三好長逸・政康・石成友通）・三好康長・安宅信康・細川信良・斎藤龍興、雑賀鉄砲衆・阿波からの細川真之・三好長治・篠原長房が参戦、総計三万。

対する織田信長勢は織田信長・雑賀衆・根来鉄砲衆の連合軍総計四万の大きな合戦であった。（この戦いでは雑賀衆は敵味方に分裂した。）当然、信長勢が有利であったがすぐに本願寺勢力が三好勢に加わり信長勢を攻撃した。同時に近江で浅井・朝倉連合軍が信長勢を攻撃したので信長は京都に退却した。この年の暮れに朝廷の仲介で和議を結び戦闘は終わった。

その後、背後に上杉、武田の脅威がなくなった信長勢は天正四年には川口の合戦の前に猛攻を仕掛けたため、野田城は遂に落城した。

### 三 おわりに

福島歴史研究会の会員は、野田・福島の局地的戦闘の状況は以前の例会で「野田・福島の合戦」を書かれた藤三郎氏自身の講義で勉強していたので十分知っていたが、今回の講演を聞いて、畿内全体、当時の「天下」における「大局的な戦闘の状況」を理解できた。参加された一般の皆さんからは、少し難しかったという人、良く分かったという人、大変勉強になったという人など様々な感想を聞いた。いずれにしても大多数の参加者が、現在自分の住んでいる、又は過去に住んでいた「野田・福島」においても歴史的に大変意義のある大戦争があったという事を理解されて、良かったと考える。講演された出水氏の言われたテレビの大河ドラマが放映される日が早く来ることを期待したい。現在、各地の行政が奨励している地域の再生・町おこしの材料であるので、其のことをよく理解されて「野田・福島」の皆さんが「町おこし」の機会とされることを期待したい。



## 二〇一五年の活動報告

事務局長 末廣 訂

今年には終戦七〇年という年で当歴史研究会では八月に「秘話・終戦の玉音盤にまつわる近衛兵の思い出」という題で地元海老江に在中の岡氏をお招きして当時の生々しいお話を聞く講演会を区民センターで開催した（17頁に報告）。

其の他の活動では会報第四号で報告した「塩野義製薬研究所と大日本製薬海老江工場の跡地」に関連してどちらも由緒がある建造物として何らかの形で残すべく要望とお願いをしていたが、すでに取り壊しが進んでいる。大日本製薬工場の煉瓦つくりの記念館は跡形もなく取り壊され、数枚の煉瓦を九月の区民まつりで展示するのみとなって残念である。

一方の塩野義製薬研究所についてステンレスの看板は地元の鷺洲小学校に、また中看板は本町の「大阪企業家ミュージアム」に保存することができた。そしてこの跡地を「リバー産業」が開発するに当たり、一月二五日の起工式に歴史研究会へ太田会長ら四名の招待状が届いた。

起工式に参列し、河社長から新マンションの一隅に近代建築の巨匠、坂倉準三氏が手掛けた名建築を残す話があり、出席者とプレスに配布された資料には「福島区歴史研究会」の声を取り入れ、建物外観とエントランスホールに使用された群青色タ



イルを一部保存する。そして「春秋の一六時には、パサージユの群青色タイルに光が差し込むように設計します」と印刷されている。この事業は「近隣愛・家族の絆」をコンセプトに近隣住民四五〇〇人超が津波から避難できるように設計されている。一昨年一二月に会で見学し、我々の要望が事業に受け入れられたことに感謝したい。

「区民まつり」や福島小学校での「ふれあい祭り」も前年に引き続き順調に終了した。

もう一つ、今年新しい展示ができた。それは大開の地元で西野田工科高校とつながりのある南條会員が、一月の文化祭で松下幸之助を中心とした「福島区のゆかりの人物展」の開催である。松下翁を知る若者が少なくなっていることを実感する機会でもあった。



西野田工科高校での展示風景

その他、五月に「福島区仏教会」より会に福島区の歴史を語ってほしいと依頼があり、事務局の末廣が「福島区の歴史あれこれ」と題してお話しました。

また一二月には海老江東小学校六年生に「戦争体験の話」として、これも末廣が自宅の前に一トン爆弾が落ち、小さいながら記憶した話を子供たちに話した。読売新聞一月一九日に紹介記事。

展示会は、福島図書館で、春に「野田・玉川の今昔」、夏に「終戦七〇年」を開催した。「各地区の今昔展」はあと「海老江の今昔」展を残すのみとなっている。区役所では、昨年からの「上福島・福島・鷺洲の今昔」、春から「吉野・新家・大開の今昔」を展示、秋から「野田・玉川の今昔」を現在も展示中。また「福沢諭吉生誕一八〇年」を特別展示した。

セミナーは五月に池田方彩氏の「創造と享受」（会報五号参照）、九月に「戦国時代・野田福島の戦い」というテーマで徳島の出水氏にお願いした（19頁に報告）。

連絡委員はじめ各担当委員制も軌道に乗りつつあり、二〇一六年もいろんな活動を考えている。

## 会員の原稿を

募集します！

福島区の記録を残しましょう



## 古い写真を探しています

お手元のアルバムをひもといて

災害や今はない建物などが

写っているものがあれば

ご提供ください

## 福島区歴史研究会 2015年下半期の事業

展示「吉野・新家・大開の今昔」 4/6～9/30 (会場・福島区役所)

展示「戦後70年ー市民生活と災害ー」7/14～10/31 (会場・福島図書館)

講演会「終戦70年記念講演会」8/23 (会場 福島区民センター)

講師 岡和雄氏・内藤真治氏

『福島区歴史研究会会報 第5号』発行 9月

「福島区民まつり」9/12 クイズ、展示など (会場・下福島公園)

セミナー 平成27年度第2回 9/13 (会場・玉川コミュニティセンター)

講師 出水康生氏「戦国時代 野田福島の合戦」

展示「野田・玉川の今昔」 10/5～3/31 (会場・福島区役所)

\*\*\*\*\*

### 2015年 下半期の活動記録 (前期追記含む)

5/18 福島区仏教会研修会 (会場・仏光寺にて)

講師 末廣訂「福島区の歴史あれこれ」

7/10 展示準備 (図書館)

7/16 企画会議

8/20 企画会議

8/23 懇親会

8/23 講演会準備・懇親会

9/12 区民まつり準備 (下福島公園)

9/13 懇親会

9/17 企画会議

10/2 区役所展示替

10/11 福島ふれあい祭り (会場 福島小学校) 展示出品

10/15 企画会議

11/6 図書館展示撤去

11/7 西野田工科高等学校文化祭展示準備

11/8～11/10 西野田工科高等学校文化祭 展示出品

11/19 企画会議

12/8 海老江東小学校6年生に「戦争体験の話」(講師 末廣訂)

★浦江塾 (協力) 7/4 9/5 10/3 11/7 12/5

ホームページ <http://o-fukushima.com/rekishi/top.htm>

(会報バックナンバーも掲載)

(印刷：谷口印刷紙業)